

ディスコグラフィー収録

ディスコグラフィー【2014No.13】(HP 収録)

分類：CD

作曲家：ヨハン・セバスチャン・バッハ他

曲名：イタリア協奏曲、フランス組曲他

演奏：アンドレアス・バッケッティ

発売：SONY

No. : SICC30167-8



概要：

1 枚目はバッケッティが進めている“バッハ：鍵盤作品全曲録音チクルス”の1枚で、ピアノは Fazioli が使用されています。2 枚目はバッハ作品のほか、スカルラッティ、マルチェッロ、ガルツピなどの曲も収められています。バッケッティはバッハに関して「バッハの作品には無限の可能性がある」としてその可能性を追求する姿勢をとっています。このようなバッケッティに対して、“21 世紀の理想のバッハ像の一つ”、“バッハ演奏に心血を注ぐ演奏家”、“21 世紀のグールド”、“鬼才”などという評価が与えられています。

下記には動画がありますので、そういった評価がどうなのか、ご確認ください。

<http://mikiki.tokyo.jp/articles/-/1272>



7月12日にはバッケッティのオールバッハプログラムのピアノリサイタルに行ってきました。アンコール曲のショパン、モーツァルト、リストなども含めて終始バッケッティペースで、ゴールドベルク変奏曲などは超スピードで駆け抜け、40分もかかっていないようでした。5月にはメジューエワのピアノで、6月には曾根麻矢子のチェンバロで同じ曲を聴いていますが、まったく曲の印象まで変わってしまうようで、なるほどこれが21世紀のバッハの解釈かという未体験のゴールドベルク変奏曲でした。非常に個性の強いピアニストのようですが、度重なるアンコールが示すように聴衆の満足度は高いようでした。

実際にCDを聴いてみると、Fazioliの柔らかい音が心地よく、バッケッティの演奏は、“ロマンティックバッハ”とも言える印象を与えてくれます。バッハはかくあるべきという堅苦しい哲学はなく、バッハがある時にはベートーベンのように、ある時にはショパンやリストのように変幻自在に聴こえてきます。

CDの中にあるフランス組曲とトッカータホ短調が生演奏と共通の曲でしたが、このCDで生演奏の雰囲気はかなりのところ味わえると思います。